

[年度] 平成20年度和歌山県農林水産総合技術センター研究成果情報

[成果情報名] 連年の弱剪定がウメ「南高」の樹体生育と収量に及ぼす影響

[要約] 4年間、間引き主体の弱剪定を行った「南高」ウメ樹は、当初の収量は多いが、樹勢低下のため、次第に収量が減少する。

[キーワード] ウメ、剪定強度、樹体生育、収量

[担当機関名] 果樹試験場うめ研究所

[連絡先] 0739-74-3780

[部会名] 果樹

[分類] 研究

[背景・ねらい]

ウメを連年安定生産するためには、樹勢を健全に保ちながら収量を確保する必要がある。しかし着果量確保のために剪定を弱くすると樹勢が低下する恐れがある。そこで、「南高」28年生樹について、間引き剪定主体の弱剪定を連年行った樹体について、樹体生育と収量への影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 樹冠占有面積 1 m^2 当たりの徒長枝本数は、弱剪定樹で強剪定樹に比べて少なく推移する(図1)。
2. 強剪定樹では樹冠が拡大するが、弱剪定樹では樹冠の拡大が認められない(図2)。
3. 弱剪定樹の垂主枝の肥大率(1樹当たり10本の平均)は、強剪定樹に比べて低い(図3)。
4. 樹冠占有面積 1 m^2 当たりの収量は、剪定開始当初は多いが、樹勢低下をするため(写真4)次第に減少する(図4)。

[成果の活用面・留意点]

1. 着果負担が樹体に及ぼす影響解明の基礎資料とする。

[具体的データ]

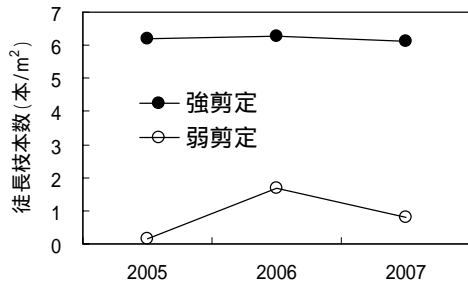


図1 樹冠占有面積当たり徒長枝本数

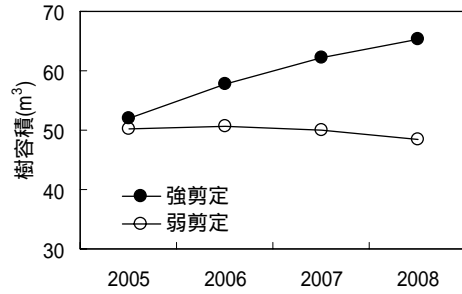


図2 樹容積の推移

注) 樹容積=樹冠専有面積 × 高さ / 3

注) 徒長枝：長さ1m以上の、基部が木化した新梢 施肥は10a当たり窒素量で25kg行った。

強剪定：主枝、垂主枝、側枝、緑枝の先端の多くに切り返し剪定を行った。剪定量は生重で約0.7kg/m²、4反復

弱剪定：切り返しは主枝、垂主枝の先端のみとし、他は間引き主体の剪定を行った。剪定量は生重で約0.3kg/m²、3反復

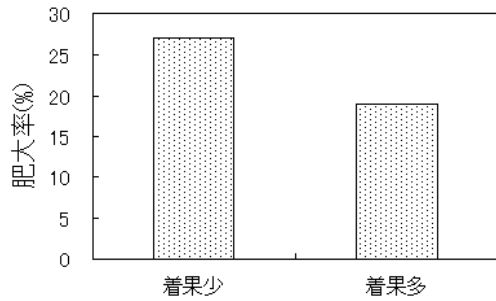


図3 垂主枝の肥大率 (2005~2008年)

注) 肥大率= $\frac{(2008\text{年の垂主枝周} - 2005\text{年の垂主枝周})}{2005\text{年の垂主枝周}} \times 100$

2005年の垂主枝周

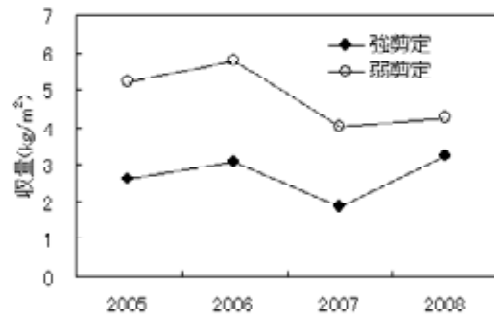


図4 樹冠占有面積当たり収量

注) 完熟落下果実収穫

・ 2008年度反収換算値

弱剪定樹3.0t 強剪定樹2.7t

(目標収量3.0t)



写真1 剪定処理樹の状態 左：強剪定樹(樹高4.6m、樹冠面積42.6m²) 右：弱剪定樹(樹高3.8m、樹冠面積38.2m²)

[その他]

研究課題名：うめの特性解明と好適栽培管理技術開発

予算区分：県単

研究期間：平成16~20年

研究担当者：土田靖久、岡室美絵子

発表論文等：なし